

大庄屋三木家の絵画

奥平俊六

(作品解説 赤木美智・吉井奈津江)

播州を東西に走る中国高速道と南北に走る播但自動車道が交差する福崎インターで高速を下り、西北にしばらく行くと特産館「もちむぎのやかた」がある。もち麦麵をはじめ当地の特産品を販売する施設だが、そのほど近くに江戸時代以来の大庄屋三木家住宅がある。農地改革などで前庭の大部分を削られてしまったそうだが、元々播州一円で大きな勢力を保ち、秀吉に滅ぼされた英賀城主三木氏に縁のある家柄で、江戸中期には大庄屋として辻川と近在の郷村も合わせて管理地は一万石に及んだ。また、三木家の近くには柳田國男記念館もあるが、三木家は民俗学者柳田國男が育った家としても有名である。

この大庄屋三木家に懷徳堂関連資料が遺されていることは、以前から知られており、かねてより大阪大学懷徳堂センターから書籍等関連資料の調査およびご寄託をお願いしていた。それが当主の御理解によって平成十六年に実現したのだが、この間の経緯についてはすでに「大庄屋三木家所蔵懷徳堂関連資料の寄託受け入れについて」(『懷徳堂センター報二〇〇五』井上了記)に詳しく報告されている。

今回は平成十六年夏に二回に渡って行われた調査に基づき、三木家から寄託を受けた絵画について若干の報告を行うことにする。

三木家の絵画資料は大きく二つに分けることができる。一つは、三木家歴代の当主が自ら描いた、近世および近代の絵画である。もう一つは、三木家歴代の当主が収集した文人画を中心とした近世絵画である。

前者には、以下のような作品が含まれている。

- 三木通明「画帖」一帖(三二図)
- 三木通深「山水図」二幅
- 三木通深「山水図(模伊孚九)」マクリ三枚
- 三木通済「画帖」一帖(一七図)
- 三木通済「画帖」一帖(一二図)
- 櫛山・煙津等「神崎十勝図」一卷

辻川に住してからの三木家は代々、播州平野を姫路へと流れ下る市川の治水、兩岸の新田開発に活躍した。四代有敬の元文二年(一七三七)には姫路藩から辻川組二十一か村の大庄屋に任じられ、その後八反田組二十二か村、山崎組十九か村の大庄屋も兼帯することになった。

六代通明(一七八二〜一八四四)は、十一歳で懷徳堂に遊学し中井竹山に学び、さらに龍野の儒者股野達軒に学んだ知識人であった。後に姫路藩

家老河合寸翁を助けて藩の財政再建に功績があったという。

通明を継いだ七代通深（一八二四〜五七）は、八歳で画をよくしたといわれ、幼少時より書画、詩文の才に優れ、多くの文人たちと交流した。大坂懐徳堂の並河寒泉や江戸昌平饗の林聖櫻にも学んでいる。また、来舶清人伊孚九に倣った「山水図」の書き入れなどから、画を浦上春琴（一七七九〜一八四六）に直接習っていたことがわかる。

通深は三十四歳の若さで没したが、その後を継いだ八代通済（一八四八〜一九〇一）も「画帖」に見るように書画に巧みな人物であり、明治十九年の奥書を持つ「神崎十勝図」は藤野煙津など当地の文化人たちとの交遊を物語るものである。十一歳の松岡國男（後の柳田國男）を預かって育てたのもこの通済である。

上記以外にも、三木幽雪・三木雅蔭といった三木家縁者の作品も寄託していた。

さて、後者の三木家関係者以外の近世絵画であるが、その中には下記のような注目すべき作品が含まれる。

向陽子賛「神農・陶弘景・董奉図」三幅

中林竹洞「春秋山水図」双幅

島琴陵「鶴図」三幅

田能村竹田「草虫図」

田能村竹田「疎林平遠図」

岡田米山人「君子一笑図」

「神農・陶弘景・董奉図」三幅対の賛者向陽子は大学頭林鷲峰（一六一八〜八〇）であり、画家も十七世紀の江戸狩野の有力画人と目される。尾張生まれの文人画家中林竹洞（一七六六〜一八五三）の「春秋山水図」は保

存のよいもので、軽快な筆致、淡明な彩色がこの画家の特質をよく示している。十余年後の賛文が別幅で付属しており、画家自身の当地への逗留を予測させるものである。

島琴陵（一七八二〜一八六二）は天保年間に姫路藩に招かれた長崎派の絵師として知られるだけで遺作も少ないが、この三幅対に描かれた鶴の精細な描写はこの画家の技量を十分に伝えるものである。竹田の「草虫図」と米山人の「君子一笑図」は、いずれも江戸時代を代表する文人画家の作品であり、主題的にも表現の面でもたいへん興味深い。

詳しくは研究科助手の赤木美智・博士前期課程学生の吉井奈津江両氏の解説に譲るが、これらの三木家の所蔵品のほとんどが近代になってから収集されたものではなく、同時代に入手されたものである点、たいへん貴重である。

（奥平）



陶弘景図



神農図



董奉図

「神農・陶弘景・董奉図」三幅 向陽子（林鶯峰）賛

紙本墨画淡彩、各九三・六×三七・二cm

神農は中国上古の伝説上の帝。初めて農業と製薬の法を民に教えたとされる。百草を嘗めて製薬の方法を編み出したとされることから、人物画の画題として草衣を着し、薬草を嘗めるさまが好んで描かれた。

本作は神農の左右に陶弘景と董奉を配している。陶弘景（四五六〜五三六）は、古典や医薬学をはじめとする諸学を修め、『神農本草経集注』などの医薬学書をまとめた。また、「梁」の国号を献じて武帝の信頼を得、以後国家の大事に際しては諮問にあずかったので、「山中宰相」とも呼ばれた。陶弘景の下方に鋭く視線を投げかけている様子は、そうした伝歴と関係しているのかも知れない。董奉は、三国時代の医者である。呉の国の蘆山に隠居していた際、治療代を受け取らない代わりに杏の木を求め、数年後には邸宅に十余万株の杏の木が植えられていたと伝えられる。「杏林」が医者を目指すのはこの故事に基づくが、それにふさわしく画中の董奉は、実を結んだ杏の木を見上げる姿で描かれている。

賛者の林鶯峰（一六一八〜八〇）は、江戸前期の幕府儒者。賛文は像主について簡略に記す。署名の向陽子および款印に見られる「仲林」はいずれも鶯峰の号の一つ。朱文円印（印文不明）を用いる画家は、画風から狩野派であると思われるが、詳細は不明である。筆法は簡略ながらも形態把握に破綻はなく、衣紋や巾などに用いられた濃墨も効果的であり、確

かな技量がうかがわれる。鷲峰の着賛を得ている点からも、狩野派の有力な画家の手によるものと推測される。また、本作品は医学に関わる伝説的な人物を描いたものだが、この三者を合わせて描くのは珍しく、あるいは、制作背景に特別な発注の想定が可能かもしれない。三木家への伝来については不明だが、姫路藩から下賜された可能性も考えられる。

なお、それぞれの賛は下記の通り。

陶弘景図（右幅）

「貞白名高術亦鴻／活人心匠施神功／任他南北戰爭日／風靜山中十八公

向陽子題」 「仲林」（朱文重郭方印）

神農図（中幅）

「得位得名又大德／百草藥毒嘗能識／繼天立極功業餘／醫國濟民躋壽域

向陽子贊」 「仲林」（朱文重郭方印）

董奉図（左幅）

「百歳董仙猶壯顔／通醫察病死生関／枝頭春意何為鬧／紅杏園中日月雨

向陽子題」 「仲林」（朱文重郭方印）

（赤木）

中林竹洞「春秋山水図」二幅

絹本着色、各一三一・二×四一・九cm

中林竹洞（一七七六〜一八五三）は、尾張に生まれ、京都に出て文人画家として重きを成した。

本作は左幅には春の、右幅には秋の情景を描く。左幅には「高山流水／竹洞山人寫」、右幅には「一峯老人畫法／天保戊戌春二月／寫於／萬山草

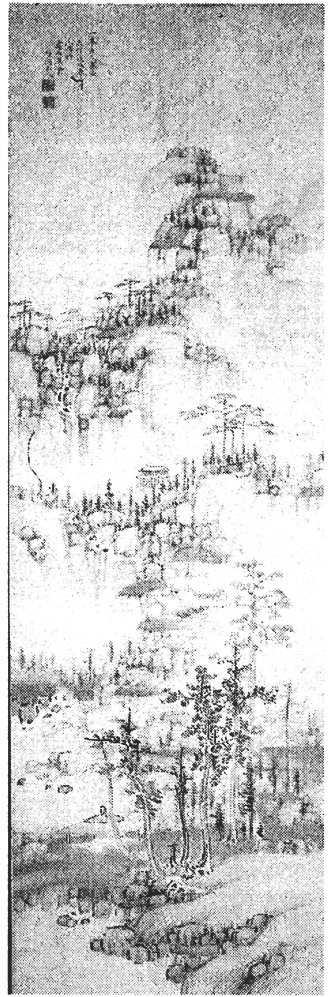
堂／竹洞山人」とする落款がある。いずれも「成昌之印」（白文方印）、「字伯明」（白文方印）の二顆の印章が捺される。右幅の落款から、天保九年（一八三八）に制作されたことがわかる。竹洞六十三歳である。

山なみを交差させ縦方向へ積み重ねる構図は共通するが、配色および樹木の描き方などで異なる季節感を巧みに演出している。左幅では、黄土色の山肌の上に青色と緑色を重ね、さわやかな春の新緑を表現している。また、上方の山には白色と桃色の花を咲かせる樹木を描き込むことで画面に華やかさが添えられ、画面手前の樹木は幹を画面向かって左方向へうねるように伸ばし生命力を感じさせる。

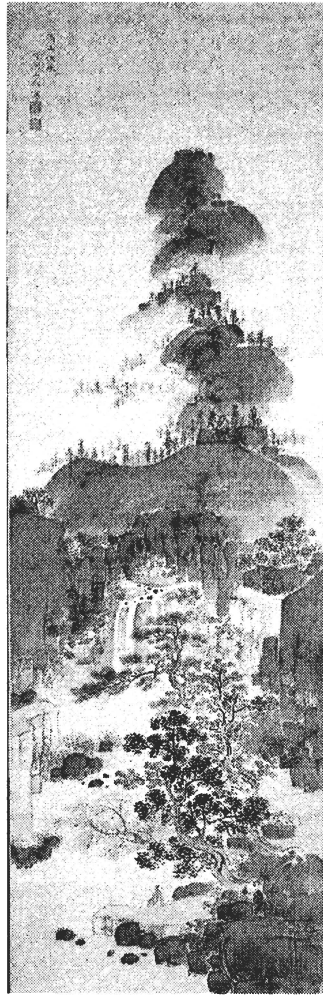
さて、「高山流水」とは、音楽のすぐれてたくみなことのたとえである。むかし、伯牙は善く琴を鼓し、鍾子期は善く琴の音を鑑賞した。伯牙が高山を想って琴を鼓すると鍾子期は峨々たる高山の如しと評し、流水を想って鼓すると洋洋たる流水の如しと評した故事に基づく。よって、画面下方で水辺に腰を下ろし、上方を眺める桃色の衣を着た人物を、春の山中で伯牙の琴の音に耳を傾ける鍾子期と捉えることが可能であろう。

対して右幅では青色および緑色はほとんど使用されず、黄土色、あるいは茶系の淡彩を用いる。また、近景の木々の幹は垂直に生え、葉もそれほど描かれない。東屋が描かれるものの、人の姿はなく、閑散とした情景を強調している。なお、落款に「一峯老人畫法」と記されていることから、一峯老人、すなわち中国の文人画家で元末四大家の一人、黄公望（一二六九〜一三五四？）の画法に倣ったことがわかる。

ところで「萬山草堂」と記されているが、この言葉が指すところは、作画の十四年後、弘化二年（一八四五）に竹洞自身によって記された、同家所蔵の書幅「萬山草堂記」に詳しく述べられている。これによれば、北宋時代の画家、李公麟は龍眠山莊図を描いて、唐代の王維がその山莊を描い



秋景



春景

萬山草堂圖
李伯時嘗作龍眠山莊圖欲以繼王摩詰輞川之作余亦欲作萬山草堂圖以學二公之意然龍眠輞川固在天地間如吾多山草堂存於吾胸臆間耳雖然吾身棲皇極之天地也哉余性好山居多絕俗離世心而莫之能遂後歲忽得鮮曰山林者在吾心而矣豈多山乎苟山林吾心則可見無非山林者大而城樓屋宇小而家具器物感吾山林也逍遙其間與物於忘則奚必求如夫輞川龍眠者為也非敢擬二公勝事聊以自遣云
弘化二年夏隱士沖澹

萬山草堂記

た輞川図を継ごうとした。こうした世俗を退き山居を好んだ先人二人の志を受けて、竹洞も萬山草堂図を描いた。しかし、萬山草堂とは、龍眠山莊や輞川莊が実在したのとは異なり、竹洞の胸中に存在する理想の山居だという。

本作は、竹洞作品の優品であることに加え、書幅と合わせて鑑賞することにより、主題に込められた文人としてのこだわりを知ることができる点においても、重要な作品である。

外箱の蓋表に「中林竹洞筆春秋山水畫幅」、蓋裏に「先生深致揮毫正筆無疑者也／大正七年□□鑿」とある。

なお、書幅「萬山草堂記」（絹本墨書、一〇九・五×二七・〇cm）には次のように記されている。

「萬山草堂圖 李伯時嘗作龍眠山莊圖欲以繼王摩詰輞川之作余亦欲作萬山草堂圖以學二公之意然龍眠輞川固在天地間如吾萬山草堂唯存於吾胸臆間耳雖然吾胸臆豈非無天地也哉余性好山居乃絕俗離世之心而莫之能遂晚歲忽悟鮮曰山林者在吾心而已矣豈前乃山林乎苟山林吾心則所見無非山林者大而城樓屋宇小而家具器物感吾山林也逍遙其間與物於忘則奚必求如夫輞川龍眠者為也非敢擬二公勝事聊以自遣云 弘化二年之夏隱士沖澹」

「中林成昌」（白文方印）「伯明」（白文方印）

（赤木）



左幅



中幅



右幅

島琴陵「鶴図」三幅

絹本着色、各九九・三×三五・七cm

島琴陵（一七八二～一八六二）は、写実的な花鳥画を得意とする南蘋派の画人。名は鵬。もと南部藩士であったが江戸で人を殺めてしまい長崎へ逃亡し、そこで絵を学んだと伝えられる。長崎においては来舶清人とも交流をもったようだ。その後天保年間に姫路藩家老であった高須書山が姫路に招いたとされる。

本作品は三幅に鶴を描いたもので、中幅は旭日、右幅は梅花、左幅は松をそれぞれ配している。こうした吉祥モチーフを南蘋派はとくに得意とし、琴陵の遺作にも多い。鶴の毛描きなどは実に緻密で、かつ立体感の表出にも工夫が見られる。例えば、鶴の頭部から首にかけて細緻な墨による毛描きが見られるが、地に塗られた墨に諧調の変化を付けることで、首の丸みを帯びた量感と質感がなまましく表現されている。同じく、岩や土坡の細かな点を用いる皴法にも南蘋派の特徴が見られる。しかし、鶴の細密な描写とは対照的に、梅の幹は輪郭線を用いず、粗放な筆法で勢いのある枝ぶりに描いている。なお左幅の、地肌が透けるほど羽根が生えそろうていない鶴の雛を描くことは珍しい。各幅に「元鵬之印」（白文方印）、「琴陵居士」（白文方印）が捺される。

姫路藩から下賜されたとも想定されるが、あるいは三木家が画家と直接交流をもった可能性も捨てきれない。とするなら、伝記に不明な点の多い画家の交流関係を考える上でも興味深い作品である。

（赤木）

田能村竹田筆「草虫図」 篠崎小竹賛、嘉永三年（一八五〇）賛

紙本淡彩 一二六・〇×二七・二cm

画面左の自賛の下に画家の印として朱文瓢形印「竹田」、および右下隅に所蔵印として朱文方印「開三木潤伎藏書画印」の二顆が捺される。本図を描いた田能村竹田（一七七七〜一八三五）は関西を代表する江戸後期の文人である。豊後竹田の藩医の家系に生まれ高い理想をもつて官職についてが幾度かの挫折を経験し、文化九年（一八一二）に職を辞した。その後は一文人として九州と京坂を旅しながら、頼山陽・浦上玉堂ら当代一流の文人墨客と交流した。賛者である篠崎小竹（一七一八〜一八五一）は、四書五経のひとつである『詩経』を重視した古文辞学派を学んで篠崎三島の養子となった人物で、本図以外にも竹田作品に着賛している。

本図は近年あつらえられた箱に収められており、その箱書から本図が夢研堂龜山氏の旧蔵であつたことが分かる。龜山夢硯（一七五四〜一八〇二）は広島の人で諱を為綱といい、書画、俳句で知られ、竹田・小竹の賛はと



もに本図が彼のために描かれたことを示している。竹田は天保六年（一八三五）に没していることから、嘉永三年（一八五〇）の小竹賛は本図制作のち十年以上の時を経てなされた後賛である。

本図は、弓なりにしなう一枝を墨によつて描き、その枝に淡彩を使つてバッタのような虫をとまらせている。本図のように、草木花卉に虫を組み合わせて一画面を構成する作品を草虫図と呼ぶ。北宋の宮廷所蔵品目録である『宣和画譜』において、「草虫」はすでに独立した画題として成立していた。博物学への関心が高まつて実物写生が盛んになる十八世紀においても、草虫図は『芥子園画伝』のような版本や中国江南地方からもたらされた明清代の草虫図の枠組みを利用して制作されることが多く、虫の形や種類は定型化する傾向にある。さらに四書五経のひとつである『詩経』への関心を背景として、ある種の草木と虫がそのまま言祝ぎの意味をになうことがあり、文人の描く草虫図を支える思想の骨子として『詩経』の存在が重要であつた。さらに、文人たちの手がけた草虫図には虫や草花のはかない生命を慈しむ繊細なまなざしを感じさせるものが多い。本図の場合は、墨で描かれた枝の中心に目を凝らさなければ見えないほどごく淡い朱を使

つて小花が点じられており、こういった透明感のある色彩から竹田が草虫に託した繊細な感覚を垣間見ることができよう。

竹田の草虫画には、『芥子園画伝』二集・三集との共通性を指摘できる『聊以寓意帖』などの作例があり、本図の図像的な典拠についてはにわかには明らかにしえないが、やはり同様の典拠をさらに広く探ってみる必要があるだろう。

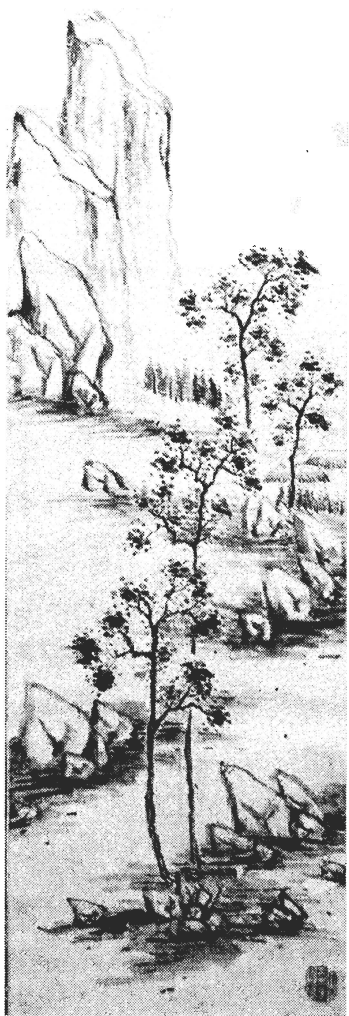
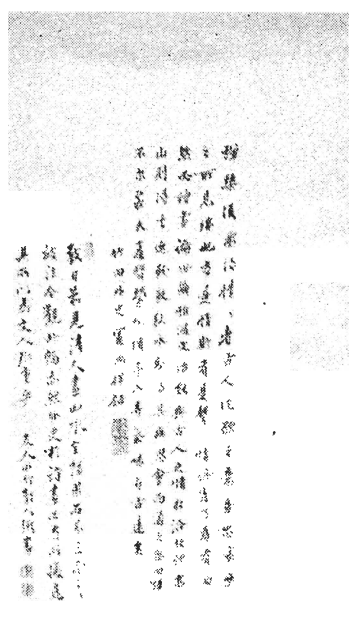
竹田の自賛は、

「夢研兄近日学詩餘於潤清□可善其聞晚云職于醒言祖濃黃昏禮未下辯□非両龍風聲清徹不索唱蜚惱殺億 竹田生并録」 白文方印「人生行樂耳」

小竹の賛は、

「我邨唱詩餘者竹田生為祖而無復繼者矣／夢研不知為何人此詞頗有風致豈学於生／而有得為平生作畫而書詞其上盖寓欣抃／之意而鼓舞之也 七十小竹老人書」 朱文連印「承弼」 引首に朱文楮円印「肅咏」

また、外箱の蓋表墨書に「竹田先生艸蟲之図賛小竹先生辞」とあり、蓋裏墨書には「竹田先生艸蟲畫幅尾□夢研堂龜山氏之舊藏也三十年前□曾觀之於其家之主人元□／己遊失藏所説而散逸此幅歸他家之手固再觀之既□重



逢舊知之喜而又不□青烟雲通／眼之感覺了遂誌得昭和三戊辰萩葡花月 七十三翁小竹霞山人惠」に朱文楮円印「竹□」、さらに「己酉孟秋月拜觀畢 題答錦江釣與□長」として、朱文瓢形印「谷□」、白文方印「豈翁」の二印を捺す。

(吉井)

田能村竹田「疎林平遠図」 竹田自賛、篠崎小竹賛

紙本墨画、一一〇・〇×二六・三 cm

近景の中央に樹木を配置し、濃墨による強い筆触を水平方向に重ねて地景を描き、余白を残しながら白い礫頭のある遠山につないでいる。樹木の葉は水分を多く含んだ筆で描いているが、右端にある草堂や岩壁には擦筆を用いている。全体として、墨と水分量を調整しながら岩・樹木・茅屋の質感を描き分けている。

画中の小竹の賛によると、小竹が数日前に見た清人の山水図三幅の皴法

と本図の皴法が近いという。竹田は京都に遊学して正当な中国画法の研究を始め、宋元はもとより明清にいたるまで諸大家を学習した。なかでも山水・人物は明の沈周（二四二七〜一五〇九年）や唐寅（二四七〇〜一五二三年）の作品に傾倒したと言われ、晩年においても、再び沈周の様式に接近し、「乾坤一草亭図」のような濃墨を用いた強い筆触の作品を手掛けている。本図のように、近景の中央に樹木を配置し左下から左上に折れ曲がるように余白をとって遠山につなぐ構成方法は、「乾坤一草亭図」に通じるものがある。

自賛に「彈葉須要詩情々者古人飛歇之意喜怒哀樂之所見端也及有情斯者是聲リ情俱肖乃為有曲ノ然必讀書論世爾雅温文始能與古人之情相洽故彈高ノ山則得雲逸致鼓秋水思詩其幽思會而通之無曲彈ノ不尔若夫薩翳榮以值手入弄氣味与古遠矣ノ竹田外史憲画併録」とあり、白文方印「富民染外」を捺す。

小竹の賛は「数日前見清人画山水全幅用石兮三面之ノ皴法今觀此幅亦然外史於詩畫必有所據是ノ其所以為文人跡重乎 友人小竹散人弼書」で、白文方印「弼之印」、さらに引首に朱文円印「三樂」を用いる。また、画面右下に朱文円印「播州三木家書画印」の所蔵印が捺されている。

二重箱の内箱蓋表墨書に「竹田翁疎林平遠図小竹翁賛辞」とあり、蓋裏墨書には「戊中清私月再觀遂答題ノ錦江釣叟□□」とあり、朱文瓢形印、白文方印（いずれも印文不明）を捺す。

（吉井）

岡田米山人「君子一笑図」文化一三年（一八一六）

紙本墨画、一二七・〇×六〇・四 cm

岡田米山人（一七四四―一八二〇）は江戸時代後期の文人画家。名は国、字は士彦、通称は彦兵衛という。寛政二年（一七九〇）九月刊行の『浪華郷友録』の画人の部に名前が記載されていることから、このころすでに画家として活躍していたと考えられる。画は山水・人物を描いた佳品が多いが、懷徳堂の前身のひとつである「含翠堂図」を描いている点も見逃せない。青年期の逸話を掲載した『播州奇人伝』によると、米山人は播磨国神東郡劍坂村の庄屋安積喜兵次に寄食して勉強し、その縁によって浪華で米屋を開業したという。また伊勢津藩藤堂侯に仕え大坂蔵屋敷留守居役になった経歴があり、その藩邸に設けた画室「正帆」を田能村竹田らが訪れた。ほかにも、『木村兼葭堂日記』に「米屋彦兵衛」「米彦」として登場することから、米山人が当時一流の文人墨客と交流していたことが分かる。

本図は、孔の空いた太湖石と竹を組み合わせ竹の下に一匹の犬を描いている。竹は歳寒三友として数えられるほかに、蘭・菊・梅と並んで四君子のひとつにも数えられる。題の「一笑図」は竹の下に一匹の犬を描いたものを指しており、「笑」の字が竹冠と「犬」の字に似た「天」という字から成り立つことにちなむという。大きな孔のある太湖石のうしろにもうひとつの寿石があり、それぞれ濃淡の墨の筆触を重ねることで岩皴を表現している。ふたつの石の後ろには白描による竹が上へのび、墨を基調とした太湖石と白描の竹が黒白の対比をなしている。この白い竹が画面に清々しいよそおいを与え、清澄な空気までも感じさせる。さらに竹は「祝」と音通し、竹と寿石と組み合わせた本図からは「祝寿」という吉祥の意味を読み取ることができるだろう。奇妙な形の太湖石や斑犬はのびやかな墨線

でとらえられており、米山人独自の画境を見ることができるといえる。

画中に「君子一笑之圖／秦先生求畫急務抱筆無適意者一日自／外婦兒肅肅作畫祝之先生所致之／紙也叱之且啓蘆己而以為余畫／肅畫尾碌耳近肅也引領于／先生久之今以其画老名利則／先生開一咲乎得矣望更是／可一笑為以此笑開先生之／咲易余所望也固作君／子一笑之圖傳係小詩以呈／詩云／竹乎何似荻犬乎／何似筆君觀開一笑／老拙畫画場／老来只漫狂 七十二翁米山人」と自賛して、白文重郭方印「米山人」を捺し、さらに引首に白文長方印「烟雲供養」を用いる。

蓋表に「米山人詩畫君子一笑図」と墨書し、箱には書簡が一通収められている。「拝啓時下愈御清祥に／被為涉為邦家大慶／至極に奉存候陳者弊行／債券募集に就ては毎々／多大なる御配慮に預り／御蔭を以て常に好成

績を／擧げ居り候次第光栄候／慶に堪えず御芳情謹て／奉感謝候借今回又復御手／数相願候第五十回農工債券／の募集に就ては一に各位の／御同情を仰き前回に倍する／好成绩を得度甚だ勝手／かま敷候へ共各方面に御推／奨御誘引被来品成下度尚此上／其特別の御尽力の程切望に／堪えず以書中懇願奉り候／敬具／大正十四年 月／東京府農工銀行／頭取鈴木茂兵衛／辻川局長殿」とある。

(吉井)



参考文献

- ・岩井忠彦『大庄屋三木家300年人と業績』（大庄屋三木家）一九九〇
- ・『姫路市史 第十五巻 中』（姫路市史編集専門委員会）一九九六
- ・『三木家340年の生活と文化“展”』（福崎町立神崎郡歴史民俗資料館）一九九七
- ・『近世の大坂画人―山水・風景・名所―』（堺市博物館）一九九二
- ・成澤勝嗣『神戸・淡路・鳴門 近世の画家たち』（神戸市立博物館）一九九八
- ・湯浅邦弘編『懷徳堂事典』（大阪大学出版会）二〇〇一
- ・宮崎法子『花鳥・山水画を読み解く―中国絵画の意味』（角川書店）二〇〇三